

仏典翻訳時に用いられた辞書、文法書、手引書等

序論

今回は、仏典翻訳（漢訳およびチベット語、モンゴル語、満洲語訳）において翻訳者の用いた辞書、文法書、翻訳の手引書を見てみたい。また、翻訳者が何を学んだかを見てみたい。それにより、現代の翻訳者が何を学ぶべきか、何らかの示唆を得ることができるのではないかと思う。また、辞書等のよしあしは、翻訳自体のよしあし、特徴を考える上でも無視できない要素であると思う。

辞典類

梵辞典は多くの場合に用いられたと思われるが、ここでは特に、対訳辞書に注目したい。

日本では辞書というと、語をアルファベット順に並べたものを思い浮かべるが、仏典翻訳においては、意味によって並べたもの（対訳分類語彙集）も辞書と呼ぶ習慣になっている。また、後に述べるが、学者基本典という、極めて異例のものも辞書の中に含めて扱われることをことわっておきたい。

漢訳においては、梵漢辞典に含められるものとして、梵字千字文、梵語雑名（ぞうみょう）、唐梵文字といった文献がある。（例えば千字文の意味がサンスクリットで併記されてあれば、梵 漢、漢 梵の辞典として使えるというわけである。）これ以外には、2000 語あまりを収める翻訳名義集があるが、出たのは 1143 年ということで、遅すぎる。そのころ仏典漢訳は既に終わっていたのではないかと思われる。また、マハーヴユットパティ（翻訳名義大集）というサンスクリット・チベット語辞典に漢訳を付けたものも出たが、仏典漢訳終了後である。

ここで梵語雑名について見ると、語数は 1250 語で、8 世紀後半成立（すなわち玄奘以後）、また、漢字表記のみならず、サンスクリットの原字表記も含まれている。単語は意味別の配列になっている。

梵語雑名も語数が少なく思われるし、あまりよい梵漢辞典が出なかったのであるが、その理由を考えるにあたって、当時の仏典翻訳者の、翻訳に対する考え方も無視できないのではないかと、わたしは考えている。

仏典翻訳で有名な玄奘は五不翻という翻訳原則をまとめている。これは漢文仏典中にも出てくるのであるが、それをわたしなりに簡単にまとめると、以下のようなものである。

「意味のよくわからないものは訳さず、原語表記とする。インド独特のものは訳せないで原語表記

とする。伝統的に原語表記をしてきたものはそのまま原語表記とする。」

いろいろな苦労を味わってきた玄奘には珍しく、手抜き翻訳の方法を考え出し、よくぞそれを公開してくれたものだという気もするが、おそらく実情は、玄奘の外地での生活が長く、その間に、多少とも翻訳不可能論、翻訳不要論の方向に傾いていったのではないかと思われる。しかしいずれにせよ、彼の翻訳論は、より良い辞書を作ろうという熱意をさますような方向性を持ったものであったということは、認めざるをえない。

仏典漢訳に 1000 年かけたことを考慮に入ると、梵漢辞典は、語数の不足等、不十分さを指摘されてもやむをえないであろう。

チベット語訳においては、仏典翻訳開始の際にマハーヴユットパティ（翻訳名義大集とも呼ばれる）というサンスクリット・チベット語辞典を作り、訳語を定めたが、これは驚くべきことである。成立は 9 世紀、語数は 9500 語程度である。この語数は、梵語雑名、翻訳名義集いずれよりもかなり多い。早めに辞書を作ると、途中で訳語を変更しなくなったらどうするかという問題があるが、とにかく、作業の助けになるものであることは確かである。

モンゴル語訳においては、マハーヴユットパティにモンゴル語訳をつけたものが用いられた。（この辞書は、現代モンゴル文学等を読むときにも、参考になることがあるほどである。）また、学者基本典という書物が編纂された。これは仏教史や当時の学問（仏教哲学、言語学、論理学、医学、技術・芸術）の概説をチベット語、モンゴル語の対訳で述べたものであり、対訳であるため、専門用語辞典としても使うことができる。（実際、辞書と呼ばれることも多い。後に翻訳の手引きの項でも扱うことにする。）モンゴル語訳においては、まず辞書を作ってから訳業を開始するという方法は取られなかった。ただ、仏典を、チベットやモンゴルの習慣にならってガンジョール（狭義の宗教的文献）とダンジョール（学問的文献）に分けて見ると、ダンジョールの翻訳開始時点で学者基本典という辞書が編纂されているということになる。

満洲語訳においては、マハーヴユットパティを短くして満洲語訳を付けたものが作られた。また、モンゴル語・満洲語辞典等も用いられたと思われる。満洲語自体が次第に使われなくなったため、仏典の

満洲語訳も、事実上中断した。

文法書

漢文で書かれたサンスクリットの文法書は満足すべきものがほとんどない。唐の時代に悉曇字記という著が出たが、文字や発音に関するものであり、文法全体をカバーしたものではない。

チベット語を見ると、パーニニのサンスクリット文法のチベット語訳が出ている。(パーニニの文典は、紀元前に書かれたにもかかわらず、世界のいろいろな言語の文法書の中でも最高峰といわれてきたものであり、優れたものである。しかし同時に難解でもある。日本語訳が最近出ているため、わたしも少し見てみたが、暗号のような文章で書かれていて、理解できなかった。本気で取り組まなければ理解できないものであると思う。この文法書は欧米でも以前から知られており、欧米の言語学への影響も無視できないし、文法記述のありかたを探る上でも、興味深い文献である。)パーニニのサンスクリット文典のチベット語訳は、チベット語訳大蔵経の中に含まれることになった。それ以外の、もっとやさしいサンスクリット文典もチベット語に訳されていると思うが、まだ十分に確認していない。

モンゴルにおいてはパーニニのサンスクリット文典がモンゴル語に訳された。一般に仏典のモンゴル語訳は、チベット語訳から訳した重訳であるが、サンスクリットの原文との照合がなされた。そのため、仏典モンゴル語訳関係者の中には、サンスクリットのできる者もいた。

モンゴルにおいては、チベット語関係では、「チベット語を容易に学ぶ書」という学習書が、学者基本典の少し前に出た。これはモンゴル語で書かれている。また、チベット語の文法書がモンゴル語に訳された。(これも、パーニニのサンスクリット文典とともに、モンゴル語大蔵経に収められている。)

翻訳の手引き

1. 出三蔵記集

仏典翻訳史上、最も重要な文献である。

この本が仏典翻訳者のために書かれたという記録はない。翻訳者のためではなく、翻訳利用者、翻訳の読者のために書かれたものと言ってよいであろう。しかし内容は、仏典翻訳者にとって非常に興味あるものである。そのため、この書が仏典漢訳僧の間で、翻訳の手引きのようにして用いられたということは、想像に難くない。仏典モンゴル語訳にあたった者もこの本を見ていた可能性がある(北村(2010) p. 15)。

出三蔵記集の内容はわたしなりに簡単にまとめると、以下のとおりである。

仏典の成立事情

既に訳された經典のリスト

経序

經典の序文やあとがきを集めたものであるが、翻訳原則、翻訳に関する論争、翻訳の様子等、仏典漢訳についての情報を豊富に含んでいる。

偽経、經典ダイジェスト版、仏教書のリスト

文献のリストは、翻訳の際にも非常に助けになったのではないと思われる。

仏典翻訳にあたった僧侶の伝記

訳経僧の伝記において何が強調されているかが問題であるので、多少とも調べてみた。訳経僧の人柄、学んだこと、翻訳に対する考え方といったことは、必ずしも強調して書かれてはいないと思われる。それぞれの訳経僧が、仏典翻訳において、どんな貢献をしたかということが書かれている。そして、出三蔵記集にある、既に訳された經典リストや経序の部と合わせて見ると、仏典翻訳の歴史が浮かんでくるという構造になっている。歴史に注目することの重要性ということは、どのような学問、技術の分野でも共通しているであろう。

2. 弁正論

続高僧伝の彦琮の部分に、この著についての言及がある。いくつかの翻訳論を収め、また、何よりも直接原文にあたることの重要性が書かれているとのことである。現在この書は、発見されていない。

3. 二巻本訳語釈

チベット語で書かれたもの。序文の中に翻訳論が含まれている。本文は、マハーヴェットパティの中の重要単語の解説である。

4. 学者基本典

仏典モンゴル語訳において用いられた。既に言及したが、もう少し詳しく述べると、以下のとおりである。

チベット語、モンゴル語対訳の書であり、主な内容は以下のようになっている。

仏教史

歴史に対する関心は、人間の本能的なものといってもよいほどであろう。ただし、ここで述べられている歴史は、訳経史ではなく、一般的な仏教史(インド、チベット、China、モンゴル)である。

翻訳論

仏典で扱われている各学問分野(仏教哲学、言語学、論理学、医学、技術・芸術)の概説。

翻訳者は、自分が翻訳しているものの扱っている分野についての知識が求められる。もし自分のあまり良く知らない分野の翻訳をすることになったとすれば、ある程度の予習が必要とされる。訳文において専門用語の区別がはっきりしなかったり、誤っていると、理解に困難を生じるし、場合によっては、

重大な結果を招きかねない。(例えば言語学分野を例にあげると、接尾辞と語尾は区別しなければならず、また、接続、接続語、接続詞も混同してはならない。また、電気関係では、電気、電荷(電気量)、電圧、電力、電流等は区別されるべきであろう。)翻訳のために特定の学問分野の必要な知識を身につけるにはどうしたらよいであろうか。あらためて大学の医学部や法学部で学ぶわけにもいかない。翻訳のためには、専門用語に注目し、その用語間の関係を知り、また、用語の間をつないでいくような学びが必要とされるかと思う。学者基本典は、そのような書物である。(ただ、当時の訳経僧は上記の学問分野の基礎知識は身につけていたと思われる。翻訳のため、専門用語を簡単にまとめたものが必要とされた。)

その他、訳経僧が学んだり、参考にしたもの

1. 既に訳されたもの

訳経僧が、既に訳されていた經典に親しんでいたことは当然である。そして、それは翻訳の際の助けともなったと思われる。実際、出三蔵記集を見ると、あの經典の訳はよかった、まずいと思うといった言及が少なからず出てくる。

2. レトリック

仏典漢訳僧がレトリックの指南書を読んだかどうかは、まだよくわからないため、これからの検討課題としたい。しかし、古典や漢詩に親しむ中で、韻文の作り方や対句の技法を身につけていたことは疑いの余地がない。

チベットおよびモンゴルにおいては、カピヤダルシャというレトリック(修辞学)の書物が読まれていた。これはサンスクリットで書かれた文献であるが、チベット語に訳され、その後モンゴル語にも訳された。その翻訳された時期から考えて、仏典翻訳者はこの書物に親しんでいたと思われる。学者基本典の翻訳論の部分にも、カピヤダルシャから引用したと思われる部分がある。

原文理解のためにも、また、文章を書く(訳文を作る)にあたって、レトリックの知識は役に立つ。たとえば、原文に、本文とは全く関係のないと思われる語句が出てきた場合、レトリックの知識がなければ、何かの誤りであると思うかもしれない。しかし、レトリックの知識があれば、語調を整えるとか、なんらかの意図があるのではないかと、まず考えるであろう。(例えば英語でも、It rains cats and dogs. という、信じられないような言い方がある。)また、訳文においては、たとえなどでは、「海のように広い」「エッフェル塔のように高くそびえている」といった表現が、その地の自然や文化と照らし合わせ

てみて、適当であるかどうかということを考えなければならない。その際もレトリックの学びは役立つものと思う。

ただ、カピヤダルシャが、レトリックのどの程度の分野をカバーしているか、どのような書き方をしているかは、検討が必要であろうと思う。

3. 訳経僧の伝記

出三蔵記集に訳経僧の伝記が含まれていることについては、既に述べたとおりである。

それ以外に、China においては高僧伝と呼ばれるものが4種ある。すなわち、高僧伝(まぎらわしいので梁高僧伝とも言う)、続高僧伝(唐高僧伝とも)、宋高僧伝(988)、大明高僧伝(1617)の4つである。このうち、年代から考えて、最初の3つが、訳経僧に読まれた可能性がある。

高僧伝は多くの僧の伝記をまとめたものであるが、配列上まず最初に出てくるのは、訳経にあたった僧侶たちの伝記である。

なぜ訳経僧の伝記が翻訳の学びに関係があるのかといえば、第一に、出三蔵にも訳経僧の伝記がまとめられているし、また、高僧伝の中には、翻訳論や翻訳方法についての記述もあるからである。それらは明らかに、あとに続く訳経僧が読むことを前提として書かれたものと思われる。

同業の者について知りたいと思うのは、人間の本能的なものといってよいであろう。また、そのような知識が、実際の役に立ったかもしれず、仕事の励みになったかもしれない。

4. 翻訳目標言語(target language)の古典、文学作品

漢文学、漢民族の古典も無視できない。

彦琮(げんそう)による八備十条という翻訳論を見ると、古典等に親しみ、Chinese についても深い知識を持つべきことが書かれている。

また、玄奘の翻訳論を見ると、孔子、老子についての言及もある。玄奘が漢民族の古典に親しんでいたことをうかがわせる。

漢文の仏典は、かなりの部分が、整然とした韻文になっている。漢民族の書いた韻文にかなり親しんでいなければ、このようなことはできなかつたであろう。

少しでも漢文の大蔵経を調べて見ると、ところどころに孔子、老子その他、漢民族の古典にかかわりのある言及があり、興味深い。

訳経僧が寺院で、漢詩や古典を読んでいるのを想像すると、違和感を禁じえないが、翻訳者はかなりの程度、ふつうの人間でなければならないということであろう。新聞も読まず、テレビも見ず、ガンの

特効薬開発のため日夜没頭している方がいるとすれば頭が下がるが、翻訳者はそのようなわけにはいかない。翻訳目標言語に親しんでいないと、翻訳の仕事にも支障が生じる。

ただ、チベット語の場合は、仏典翻訳のため、文字を作り、書き言葉を作ったため、翻訳のためチベット文学に親しむというようなことは、しばらくの間はできなかった。翻訳が始まったころは、書かれたチベット文学はまだ存在しなかった。

まとめ

以上をまとめると、まず仏典漢訳は、辞書や文法書に関する限り、かなり劣悪とも言うべき環境のもとで行われたようである。使い物になるサンスクリットの文法書や辞書が手元にあったかどうかも疑わしい。漢民族はサンスクリットの辞書作りや文法書編纂に対してかなり関心が薄かった。このような事情が、漢訳仏典の翻訳の不正確さの一つの原因かもしれない。文質論争において、文派が勝利したということも、質（意味内容）の軽視につながったのではないかと懸念される。また、漢訳の仏典は、各行4字、あるいは7字、5字の、きわめて整った韻文になっていることが多い。翻訳を正確にしようすれば、こうはならなかったであろうと思われる。特に仏教哲学などは、翻訳の正確さがもっと要求されるのではないかとと思われる。漢民族は、原作に迫るよりも、漢化した、あるいは漢的仏教を作ろうとしたのではないかとさえ思われるほどである。一方、仏典のチベット語訳においては、翻訳のきわめて初期に、かなり語数の多い辞典が作られた。パーニニのサンスクリット文典も、チベット語に訳された。「東洋における翻訳者教育の伝統から(1)」(翻訳通信2011年8月号)において、チベットにおける翻訳者訓練について述べたが、それをみても、チベットにおける翻訳にかける熱意を窺い知ることができよう。モンゴル語訳においても、ある程度の質の高さをみることができると思う。

仏典漢訳における問題点を指摘したが、それではチベット語訳は理想的状況だったかといえ、必ずしもそうばかりとはいえない。チベット語においては、仏典翻訳のために、サンスクリットの影響の強い書き言葉を作った。つまり、話し言葉を表記するために文字を作ったのではなく、かなり人工的な書き言葉を作ったのである。このような方法では、原文のくだけた表現、荘厳な文章といったものが、訳文に十分に反映されない。また、原文の中に出てくる独特の表現も、それが独特なものかどうか、訳文を見てもわからなくなる。訳文が自然なものになっているかどうかといような判断は、ほとんど不可能

である。

次に、モンゴル語訳についてはどうかと言えば、これも問題がないとはいえない。石浜氏編のマハーヴェットパティを見ると、それぞれの語に対して、モンゴル語には2つの訳語があげてある。すなわち、訳語の不統一という問題がある。

ただ、いずれの場合も、翻訳者がみずから必要なことを学ぼうとしたこと、あるいは何らかの翻訳者教育のあとが見られることは興味深い。

参考文献

- 青木信治、橋本勝編「入門・モンゴル国」平原社、東京、1992年
- トーチグ・アルタンボラク「モンゴルにおける『カーヴィヤードルシャ』の影響について」(日本モンゴル学会紀要第33号)、2003年
- 井藤広志「満洲語訳大蔵経について」(アジア研究所所報 第075号)東京、1994年
- 石川美恵訳・注「二巻本訳語釈：和訳と註解」東洋文庫、1993年
- 今枝由郎「チベット大蔵経の編集と開版」(岩波講座東洋思想 第11巻チベット仏教)1989年
- 金岡秀郎「『メルゲッド・ガルヒン・オロン』研究序説 清代モンゴルにおける仏典翻訳に関する一資料」、大倉山論集 20、大倉精神文化研究所、1986年
- 金岡秀郎「モンゴル語仏典における借用語許容の規範 『メルゲッド・ガルヒン・オロン』に見える不翻の理論について」大倉山論集 22、大倉精神文化研究所、1987年
- 金岡秀郎「清代モンゴル翻訳文献概史 『メルゲッド・ガルヒン・オロン』成立の背景」、大倉山論集 21、東京、1987年 2.
- 金岡秀郎「モンゴルは面白い」トラベルジャーナル、東京、1993年
- 金岡秀郎「『merged Garqu-yin orun (mGo)』序章所載 『モンゴル仏典の翻訳論』和訳と註解 附蒙蔵対訳テキスト」、日本とモンゴル第40巻第1号(No.111)、東京、2005年
- 金岡秀郎「モンゴル語仏典翻訳の規範 『merged Garqu-yin orun (mGo)』序章に見る翻訳論」、実験音声学と一般言語学 城生伯太郎博士還暦記念論文集、東京、2006年
- 北村彰秀「東洋の翻訳論」ウランバートル2007年
- 北村彰秀「続 東洋の翻訳論」ウランバートル2008年
- 北村彰秀「東洋の翻訳論」ウランバートル2010年
- 「国訳一切経 和漢撰述部 31 史伝部一 出三蔵記

集」東京、1950年（初版）、2000年（改訂三版）。
「国訳一切経和漢撰述部史伝部八 唐高僧伝 上」、
東京

Ts. シャグダルスレン「古典式モンゴル文語あるいは
モンゴル経典言語の若干の特徴について」、日本
モンゴル学会紀要、第32号、日本モンゴル学会、
2002年

中嶋隆蔵編「出三蔵記集 序巻訳注」京都、1997年
パーニニ著、吉町義雄訳「古典梵語（サンスクリッ
ト）大文法」泰流社1995年

水野弘元「経典はいかに伝わったか 成立と流伝
の歴史」東京、2004年

渡辺照宏「お経の話」岩波新書、岩波書店、東京、
1967年

Y. Ishihama, Y. Fukuda: A New Critical Edition of the
Mahāvīyutpatti – Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary
of Buddhist Terminology. Materials for Tibetan-
Mongolian dictionaries, Vol. 1, The Toyo Bunko, Tokyo,
1989.

Baker, M.(ed.) :Routledge Encyclopedia of Translation
Studies, 1998.

Merged Garqu-yin orun. 1742.

Merged Garqu-yin orun. 内蒙古人民出版社、フフホト、
1983年

Merged Garhu-yin orun 「智慧之源」民族出版社、北
京、1988.

Merged Garhu-yin orun 「智慧之源」民族出版社、北
京、2002年（1988年に出たものと同じであると思
うが、細かいところは未確認）

Tübed kelen-i kilbar-iyar surqu neretü bichig, 1737.

北京市民族古籍整理出版規画小組弁公室満文編集部
編「北京地区満文図書総目」沈陽 2008.

K. Ray (ed.): Mahakavi Dandi's Kavyadarsah – Text,
English Translation & Commentary of Sri Premchandra
Tarkavagisa Delhi, 2004. (Dandi は Dandin の誤り
であると思うが、記載どおりにここに記す)

Sodobilig: Shashin-u toli, Hühehota 1996.

Mongol ulsyn shinjlex uxaany akadyemi, tu'uxiin
xu'reelen: Mongol ulsyn tu'ux IV, Ulaanbaatar 2004.

G. Luvsanceren: Buddyn ulamjlalt medleg uxaany u'ndes,
Ulaanbaatar 2007.

Ch. Narantuyaa: Mongol bichmel sudryn tovch,
Ulaanbaatar 2002

（なお、モンゴル語の文献は省略した。必要な方は、
「東洋の翻訳論」シリーズの中の文献目録を見てい
ただければ幸いである。ただし、縦文字モンゴル語
のものは大体において、含めた。また、「東洋の翻
訳論」シリーズにおいてあげなかったモンゴル語文

献については記した。その際、文字化けを避けるた
め、ラテン文字による表記とした。）

参考サイト

www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/jiun/

www.geocities.jp/rekikyo/pdf/070106pfd

<http://21dzk.1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

付記

学問的記述では満州語ではなく、満洲語と書く習
慣なので、本論考もそれに従った（中国東北部で話
される Chinese の方言を満州語ということがあり、
それと区別するという意図もある）。

筆者メールアドレス

a_kitamura07@yahoo.co.jp